

アフガニスタン・クンドゥーズ州におけるMSF外傷センター爆撃に関する内部調査 (和文抜粋版)

2015年11月6日
国境なき医師団日本

- 9月29日、クンドゥーズ州での戦闘激化を受け、国境なき医師団（MSF）は現地です以前から広く周知されていたMSF外傷センターのGPS座標を改めて米国国防総省、アフガニスタン内務省、アフガニスタン国防省、そして首都カブールに駐留する米軍に伝えた。このとき共有された同センターのGPS座標は、主要病棟が北緯36°43'4.91、東経68°51'43.96であり、事務部門の管理棟が北緯36°43'4.29東経68°51'42.62である。
- GPS座標は米国国防総省と米軍に確認され、両者ともこの座標が適切な当事者に伝えられることを保証した。アフガニスタン内務省からも口頭で確認を得た。
- MSFは同じGPS座標を国連の連絡調整機関と共有し、北大西洋条約機構（NATO）の主導による「確固たる支援任務（RSM）」にも直接伝えられることを確認した。
- 同センターの入り口にはMSFの旗が立てられているが、10月2日、さらに2本の旗が屋上に立てられた。同センターは爆撃の夜、クンドゥーズ市内で発電機から十分な電力を確保していた数少ない建物の1つであった。
- その日の夜、爆撃が始まるまで同センター内やその近隣は非常に落ち着いていたことを、現場にいたMSFスタッフ全員が証言している。周辺で戦闘は発生しておらず、航空機の飛行音も聞こえず、発砲や爆発の報告もなかった。
- 爆撃は深夜だったが、当時、同センターではすべての部門で慌ただしく業務が行われていた。空爆開始時点のセンター内の患者は105人。MSFは、そのうち3～4人が政府軍の負傷兵、20人ほどがタリバン構成員の負傷者とみている。爆撃の時点で、敷地内にはMSFの現地スタッフ140人と外国人スタッフ9人、赤十字国際委員会の国際救援職員1人がいた。
- 爆撃は1時間ほど続いたといわれているが、1時間15分という報告もある。収まったのは午前3時～3時15分ごろであった。
- 同センターの敷地内で、複数回にわたる精密かつ継続的な空爆の標的とされたのは主要病棟であり、ほかの建物は比較的軽い被害にとどまっている。紛争の各陣営に通知されていたGPS座標は同センター内の主要病棟を正確に指している（当該の座標は、爆撃を受けた主要病棟の正面玄関前から取得された）。

- 空爆の第一撃のあと、手術室で勤務していたMSF医療チームは滅菌室に避難。手術台の上にいる患者2人が空爆で命を奪われている。
- 管理棟で就寝していた外国人スタッフは早い段階の爆音で目が覚めた。ひとりの看護師が同棟に逃れてきたが、彼は、頭のとっぺんから足の先まで粉じんと血にまみれ、爆発で負傷した左腕がわずかな組織片により切断を免れていた。左目と中咽喉にも出血が見られた。
- 繰り返し空爆を受ける主要病棟から避難しようとした人びとが、機銃に撃たれるのを見た、と多くのスタッフが語っている。この銃撃は航空機からのものと思われ、逃げる人びとの後を追っていたようだとの報告もある。MSFの医師や医療スタッフも敷地内の別の場所に逃れる際に銃撃されている。
- あるMSFスタッフの報告によると、入院病棟からの避難を試みた車いすの患者1人が爆発の破片で命を奪われた。また、MSFの医師1名が爆発で片脚を切断されている。
- 主要病棟が今回の爆撃の第一標的だが、同センター敷地内のほかの場所も被害を受け、南区域では破片創がもとで亡くなった非武装警備員2名が発見されている。

結論

- 国際人道法に基づき、医療施設の中立性を尊重することが爆撃以前に取り決められ、紛争の全当事者から合意を得ていた。
- 爆撃の時点で、MSF外傷センターには105人の患者がおり、外科処置も行われ、医療施設として全面的に機能していた。
- 「武器の持ち込み禁止」をはじめとするMSFの病院内規則が実践・尊重され、爆撃の時点で、同センターは完全にMSFの管理下にあった。
- 爆撃の時点で同センター敷地内に武装戦闘員はおらず、近隣地区も含め、戦闘は発生していなかった。
- MSFが通知したGPS座標は正確なもので、アフガニスタンと米国の首都に駐在するMSFチームはそれぞれ、爆撃が行われているとの警告を当事者に発していた。